

## 東寮・旧体育館に関する懇談会（第2回）

2007年1月18日於本館理事長室 13:30～15:45

大学理事会：原田明夫理事長、湊晶子学長、堀地史郎常務理事、桃井明男事務局長  
東女レーモンドの会：永井路子（発起人・44年国専）、藤原房子（代表・53年文社）、田邊道子（事務局・66年文社）、叶谷渥子（61年文英）、堀江優子（83年文史）、大塚裕子（91年文日）

\*叶谷渥子さんの祈りで始まり、それから懇談に入りました。まず藤原代表から、前回の懇談会（2006年11月10日）以降に集まった署名簿を提出しました。前回お渡しした7077名と合わせて8484の署名が寄せられています。また本日、ご都合によりご同席になれなかった鳥山明子発起人（43年英専卒・荻窪南教会牧師）からの嘆願の手紙をお渡ししました。

\*ここから理事長の許可を得て、テープに録音を始める。

### <東寮・体育館の保存に関する懇談について>

藤原 今年になってから原田さんが、日経新聞の夕刊の「明日への話題」欄に文章を書いていらっしゃるの、私は最初から拝見しています。先週には「対話が足りない」というテーマで書いていらっしゃいましたが、あれは本当におっしゃる通りだと思ひまして、今日のような集まりにも、大変よいことを書いてくださったと、大変感謝しております。

永井 それはよいですね。

藤原 こういう集まりも対話のための場ですので、正直に率直にお話しさせていただきたいと思ひます。よろしく願いいたします。

永井 対決の場ではない。みんなが東京女子大のことを考えているわけで、考え方にもいろいろあるということをお互いが認識して、その上での話し合いを進めていただければと思ひます。

原田 これまでに2回、こういう形でお話を伺いましたが（→注1）、私どももできるだけ率直に申し上げるようにしたい。私もいろいろ考えさせられたところはあります。その後もお話、あるいは文書でいただいたものもあります。中でも誤解を与えやすいのは、署名の全員が卒業生と在校生だと思つたということ。それを前提にした文書もありました。

藤原 そんなことを誰が書いたのですか。

原田 誰がというのは申し上げられない。録音を録らない形ならお知らせしますけれど。そういうのをいただいたりするわけです。

藤原 私たちはそんなことは一言も言っておりません。

原田 ただそういう形で伝わっているということがあるのでしょうか。おっしゃる通り社会的な関心もありますから、それに対して関心を持たれる方があるのですけれど、東京女子大学の卒業生、在校生も含めて8000名がこういう運動を起こしているのだと、署名しているのだということをお手紙を、つい最近ですが、頂戴しています。

藤原 事実誤認ですね。

原田 ぜひそういうことをもう一度……。

藤原 でも、そういうことをもって私たちがやっていることが否定されるのは困りますね。

原田 別にそれで否定するわけではありませんが、大学がさまざまな経緯を経て決定してきたことに對して、卒業生を含めて8千数百名の方が声を上げているという形で……。

藤原 「卒業生を含めて」というのは本当です。何割かはわかりませんが。

原田 いずれにしても文書にさせていただく中で、だいたいおっしゃりたいこともわかりましたし、私どもの申し上げたいこともご理解いただけたと、私は思っています。ご理解というのは、その中身についてご了承になられたということとは……。いずれにいたしましても大学といたしましては、キャンパス整備計画を作るにあたりまして、すでに正式な決定を経ております。できればこういう形でお会いするのは、これが最後にさせていただきたいと思っております。

永井 それは今日のお知らせの経過によって、結論としてどうするかということをお考えいただいた方がよろしいかと思います。

原田 そうですか。私どもはそういう考えですね。これ以上もしやるとするならば、私どもとしては大学として正式な決定なわけですから、それに対してどうしても納得できないということであれば、少なくとも大学の決定を争うための手段をとっていただく以外に方法はないと、私は思っています。

堀江 例えばどういうことですか。

原田 例えば、建築差し止め請求とか。

堀江・大塚 ははあ。

田邊 いろいろお知恵を拝借するようで恐縮ですが、他にも何か……。

原田 わかりませんが、そういうふうに私は思っています。

田邊 今までも言っていましたけれど、私たちは対立とかということは、一切考えておりません。ご説明をお聞きしたい、そして理解したい、その上でよりよくと。ともかく東京女子大のことだけを考えているわけですから、東京女子大がよくなっていくためにこうやって伺わせていただいています。

原田 私自身、東京女子大の過去も現在も将来も思わないで、こんな仕事は引き受けられないです。そういうことを理解した上で、しかし社会的存在としての大学が過去を背負いながら、現在を前提として、将来にわたってやるべきことをやっていくために、大きな岐路を迎えつつあるのです。それに対して私は私なりに誠心誠意これまでやってきたつもりですし、取るべき措置と言いますか、それについての相談も十分にやってきたと思っています。いずれにしましても、そういうことですから、できるだけ認識を一致させて、それぞれ考えていきたいと。私どもも皆さん方が大学を愛し、大学の将来を考えながら、いろいろ提案なさっているし、それを前提にして運動を進めておられることは理解していますし、それをまったく無にするつもりはありません。これからも十分考えさせていただきたいと思っておりますが……。

永井 この前もお話し合いをしましたので、こういう話し合いは無意味だから打ち切りたいというようなお知らせをいただきました。が、前回のことを考えますと、まずは両方が言いたいことを言う——これは議会でもそうでございます。まず与党と野党が言いたいことを言う——一つの対立段階でございます。そこで意味ないというのは、まことに納得できない気持ちでございましたら、もう一度こうし

て機会を作ろうとお考え直しくくださった。これは大変に感謝しております。あれだけではまったく不毛なのです。両方が言いつばなし、聞きつばなしということではいけないと思いますので、今のお話をもっと掘り下げて、打ち割ったご意見をまず伺いたいと思います。

### <キャンパス整備計画の背景>

**原田** そのために、今日はどうぞ皆さん、おっしゃりたいことを、思いの丈をお話してください。皆様方の基本的認識として、保存すべき建物として挙げられている東寮、旧体育館は、建築史的に貴重な建造物であるということが第一。それから第二に、本学の建学の精神を具現化したものであって、これをそのまま保存する必要がある。こういう見解に立っておられるわけですね。つまり精神をどうこうというよりは、建物そのものを残してほしいと。大学としては、今、大学が背負っているさまざまな問題、特に現在や将来の運営をどうしていったらよいかという観点から、全体的、相対的に考えていくという立場です。そういう立場から判断せざるを得ないですね。

建物が次第に老朽化していく、そして次々に……。また必要があればもう少しご説明しなければいけないかもしれませんが、一般的な建物もそうですが、大学とか教育関係の建物はことさら地震対策とか、その他安全上の措置をとっていかなければならない。そういうことが次々に起こってきているわけですね。そういうものをクリアしながら、キャンパスを整理していく必要がある。この前も申し上げましたけれど、安全対策もございますし、しかも無制限に敷地がある、お金がある中でやるのではなくて制約がある。現在の建物の中で、どうしても本学が残していかなければならないと思うものは、7つの建物を中心として残すことにして、それを基本にして全体のバランスをとった形でのキャンパス整備計画を立ててきたと認識しているわけです。

7つの建物は残すことにしていますから、これは文化財に指定しています。またそこをメモリアルゾーンとして周囲の環境に配慮しながら残していくということです。しかし東寮および旧体育館についても、そのまま残せということは……。私どもはそこまでは、学生の数を考え、将来のことも考えて、安全でかつ過去の環境をできるだけ保持しながら、大学の建学の精神も建物も残しつつ対していくという観点から、私たちとしては取りうる最善の整備計画を立てることができたと考えているわけです。

### <9棟そろったランドデザイン>

**藤原** ちょっとよろしいでしょうか。もう20分が経過してしましまして、対話というのはコミュニケーションが肝心です。

**原田** ええ、どうぞ。

**田邊** このシンポジウムの報告をお渡しして、話し合いの中で……。

**藤原** 今、理事長がおっしゃられたようなことを、私ども承りました。今、いわばおさらいをしていただいたという感じで拝聴しておりましたけれど、その上での反省としては、前回は具体的な提案というまでに至れなかったということ、非常に口惜しく思っているわけです。それで今日は3号館のを中心にしてご提案します。先ほども玉突きで直していかなければいけないということでした。限られたスペースの中でやっていく中で、3号館の跡地、3号館の身の振り方を決めながらやっていくことがよいのではないかと、私は個人的に思っていたのです。それでみんなと相談して、今日は新しい提案を

ベースにして、今までの話を織り込みながら意見を申し上げていければと思います。

**原田** その前に皆様方のご主張の中では、東寮そのもの、もしくは体育館そのものを、どうやって使おうと考えていらっしゃるのですか。そのあたりからまず……。

**藤原** はい。それを申し上げたいのですが……。

**大塚** 今、理事長がお話しくくださった、建築史的に優れている、それから建学の精神を反映したという2点について、私自身この運動を通して思い至ったことですが、やはり9棟そろってのレーモンド建築のグランドデザインが、実は女子大のブランド力になるものだと考えています。その内容は今のお話で挙げてくださった2点に集約されますが、これからの将来設計において女子大の顔として「9棟そろったグランドデザイン」というものを提示する時に、やはりモノが残っているということが非常に重要な意味をなすと思います。

ここで具体的な話になる前に一つだけ申し上げたいことがあります。先ほど理事長が、女子大を愛すればこそ、理事長を引き受けてくださったというお話をなさいました。そのことは私どももよくわかります。例えばクルート社が出している「カレッジマネジメント」という雑誌の今月号に、「理事長の責務」という記事がございますが、これを読んでみても、今、理事長を引き受けてくださるということが、どれだけ大変なことが実感できます。私大改正法が出されて、ある意味で大学に競争を任せてしまっている状況の中、これからどういうふうに向向性を見出していくかという大変さを、私どもも痛感している次第です。

話を戻して、「9棟そろったグランドデザイン」に価値を見出す上でも、東寮と体育館という建物自体が十分武器になり得るという感覚を持っているわけです。もちろん、今回のキャンパス整備設計をしてくださった三菱地所設計の方々もレーモンドのことにはお詳しいと思うのですが、9棟そろってのグランドデザインという点を活かして考え直していただければ、もしかすると今回のそのキャンパス整備計画のように安全ということを配慮した上で、新たなデザインができるのではないかと期待感を我々は持っています。

そういうことを前提にしました上で、3号館の跡地利用というものを基本にしまして、東寮と体育館を残しながら、キャンパス整備をしていく。かつ将来にわたって東京女子大学のブランド力を高めていくことができるのではないかと思います。

**堀江** 補足して、今お渡ししましたシンポジウム報告の19頁、東工大大学院教授の藤岡先生のご説明ですが、「体育館——後ろに寮の煙突が見える高さ・空間を支える構造」というところがあります。ここで先生は、体育館の位置づけについておっしゃっています。報告の14頁に大学の全体計画の模型の写真がありまして、そこに「南から寮の煙突に延びる道」というのが指摘されています。これは現在は存在しない道なので、指摘されないとピンとこないのですが、計画にはありました。この道からまっすぐ正面に体育館が建っています。

このキャンパスが最初にできた時には本館も講堂もなかったわけで、この体育館を中心にした方のスペースからできたのです。体育館で卒業式も入学式も、あらゆる式典をしています。そういう視点でこの図を見ると、その当時、あの体育館がどう役割を担ったかがよくわかります。体育館が大学の顔となっていたのですね（それであるような品格のある外観）。そして体育館の後ろに寮の煙突が見えたのです。寮は人格を育てるところであって、その建学の精神の象徴として寮の存在を示す煙突が、当時顔で

あった体育館の後ろに見えたわけです。それを見せるためにこそ、体育館は階段3段ほど地下を掘って、高さを低くしている……というお説です。

「9棟そろってのグランドデザイン」ということには、今現在の9棟だけでなく、9棟が出来上がっていく過程も含まれていると思います。これだけの建物を、いっぺんに建てることはできませんでしたから、時間をかけて9棟が建てられていったわけですが、その最初の時点から体育館と東寮があって、大学としてきちんと体裁が整うようなデザインがされていた。そういう大学の歴史の証しがこの2つの建物にあると思います。すみません。「9棟そろってのグランドデザイン」ということに、補足させていただきました。

**藤原** 何だか畳みかけるようなことになってしまって、申し訳ありません。仏教に、仏法僧という言葉がありますね。霊性とか知性とか、生活する体とか、ですから東寮と体育館というのは、まさに体とか心とか人格とか、そういうところですよ。今、指定されている7つの建物は知性とか、教育とか、インテリジェンスに関わる。それからチャペルは霊性、精神性に関わる。だから体の部分がどうしても軽視されている。やはりバランスを取るということは、三つのものがあると、そういうことではないかと。だからグランドデザインということが非常に重視されているし、体育館と寮という建物は、いかにも奥にあって陰に隠れているようには見えるけれど、これがあるということで全体が統合されているということです。

ですから7つの指定は本当にありがたいのですが、プラス2がなかったのが惜まれるというのが、私たちの主張です。

#### <東寮を研究室棟に①/旧体育館はそのまま活用を>

**堀地** で、3号館をどうやって使われるのですか。説明してください。

**藤原** では、3号館の使い方についてお願いします。

**大塚** 3号館は取り壊した後に、使い方がまだ決まっていなくてお聞きしたのですが……。

**堀地** まだ決まっていません。で、3号館をどういうふうにするのですか。

**大塚** それで今回、新しくライシャワー館の前に部活棟を建てる計画ですが、それを3号館跡地に建てて、かつその建物は少し高層の建物にすることによって、教室なども充実させてはどうかと考えています。もちろん、詰めた設計方針があるわけではないのですが……。

**堀地** そして旧東寮と旧体育館の使い方は。

**大塚** 旧東寮は先生方の研究棟として使用してはどうかと考えます。

**藤原** ですから旧東寮の外側はそのまま活かして、中をリノベーションして、そこを研究室あるいはセミナールームとする。そうすることで寮の2階建てを活用できないでしょうか、というのが一つの提案でございます。そして3号館のところはもっと高層化したビルを建て直して、足りないものをそこに入れるということです。ですから三菱地所設計さんの優秀な創造力と開発力で、その設計を考えていただくことができないでしょうか。それが私たちの提案です。

**堀地** 東寮を研究室にする。そして旧体育館は今の体育館のままですか。

**田邊** 体育館は今のまま二つで。プログラムが多様なので、ダンスとか球技とかの授業を並行して行うには、体育館が二つあった方がよいというお話を聞いています。

藤原 私もそのことを伺いました。

田邊 ですから、今の状態で困っているわけではないということです。それから今日こちらへ伺ったら、カメラを持った方がおられました。「何か取材するのですか」と聞きましたら、NHKの「いと6けん」のバレエの撮影とのことでした。この前もどこかの音楽会社が、プロモーションビデオを作るために撮影場所を探していたが、やっとここに素晴らしいクラシックでチャームな場所があったということで、旧体育館で撮影をしたという話を学生さんから聞きました。ですから旧体育館はあのまま残しておけば、授業にも役立つし、皆さんの注目を集めて、経営的な活用にも役に立つのではないかと思います。

堀地 こんなご提案があるとは予想していなかったのですが、確かに旧東寮については用途をどうするかが大問題なのです。前にお話ししましたように、我々としては寮として使うつもりはまったくくない。

藤原 私どもも寮としては考えていません。

堀地 わかります。そういうことを申し上げて、今度は研究室にすると。そうすると、あれはご承知のように寮ですから、天井の高さが低いのです。ですからかなり大々的な改装ということになりますね。そういう問題があるということと、それから我々が考えた時に一番大きな問題は老朽化の実態をどう考えるかということなのです。結局それは改修ですね。外観を残すわけですね。外観を残して内側を大々的に変えるということは、大変な工事を伴うのです。私は専門家ではありませんから、話をするにはしてみますけれど、そういう問題がつきまとうのです。要するに東寮は、寮としては大変すばらしい役割をしました。ところが今、寮以外の用途にするということには難しさがあるのです。それが設計者たちが考えたことです。

で、3号館は歴史的な建築物ではありませんから、それを取り壊して高層ビルにすることはあり得ますけれど……。ただもう一つは現在の敷地を利用しながら、何かをどかしてそこに何かを作って、それを移転するという動きでやっているわけですね。つまりその間はどこか別に場所を借りればいいのだけれど、そうするとお金もいるし、どうするかと考えるのです。

田邊 建築の素人が、言ってしまえば思いつきのような形で、レーモンド建築であり、建学の精神の宿っている建物を何とか残したいという前提で考えていることなので、専門家に……

堀地 お考えはそれなりに話せますけれど……。

田邊 敷地に余裕がないので、パズルのように順番に動かさないと新しい建物は建たない状況だ、というお話でした。私たちが研究棟ということを見つけたのは、本当に足りないものは何かと考えた時に「3号館はかなり老朽化して危ない」という話が私たちの耳にも入っていたのです。

するとあそこにいらっしゃる先生方に、どこかきちんとした所に入っていただかなければならない。その時に、東寮の個室を二つ、三つ、先生が必要なスペースをぶち抜けば研究室ができる。そうすると100室ありますから、25室か30室はできるわけですね。そういう形で3号館の先生方にまず東寮に移っていただく。東寮の外観はそのままにして、中を改装してきちんとして、冷暖房も完備する。それに無線LANでコンピュータをつなげますから、今の技術だったらそのくらいのことは楽だと思います。三菱地所設計さんの力をもってすればどうってことはないでしょう。そういうリフォームした使い方は、今、それこそ流行りと言っていていくらいなされているわけですから。

そうやって3号館の先生方には東寮に移っていただいて、その後3号館をつぶして、それで3号館跡

地をどのように使うかということは、また皆さんとごいっしょに考えさせていただければよいことではないかと思ったのです。3号館の方は、杉並区の都市計画課に伺ったところ……。

堀地 話はわかりました。

### <建学の精神を浸透させるために>

叶谷 私が申し上げたいのは、建物よりも精神的なことです。私たちが在学中の昭和30年代は、1年生の時にこの“*Our College*”という手作りの教材を使った英語の授業が毎日あったのです。それも朝8時からです。外国人の教師ですから、黒板拭き持って、チョークを持って、8時にはちゃんと教室の前に立っていました。だから遅刻できないのです、前からしか入れない部屋でしたから。外国人の先生方は外国人教師館に住んでいるものですから、時間ぴったりに来るのです。この授業で建学の精神を叩き込まれたわけです。だから我々の年代は何でも知っています。ライシャワー氏がこう言った、新渡戸先生がこうだった、安井先生がこう言った、QGSの語源はこうだった——*Queen Garden's Society*からきているのだ——ということを知っていたけれど、今の学生たちは知らないのです、そういうことを。

藤原 somethingも知りませんよ。

叶谷 *Service & Sacrifice*とか、somethingが大事っていうことも全然知らない。私はTWOキャリアネットワークという卒業生の自主グループに入っていて、たまたま今日はお祈りのために引っぱり出されて来たので、まず建物のことはどうでもいいのですけれど——あら、すみません——TWOの場に行きましたら、この“*Our College*”を習っていない人ばかりです。田邊さんでさえ習っていないのです。

田邊 5歳下です。

叶谷 しかも上級の藤原さんたちも習っていない。

藤原 習っていないけれど、私たちの頃は日常的に、天達先生や北村先生、杉村先生とかが、ことあるごとにそうしたことをおっしゃったわけです。

湊 このことは私、毎年オリエンテーションで話しております。30分間です。

叶谷 それは本当にお願ひします。ただ私たちは1年かけてやったのです。今は先生方も知らないのですから。

藤原 斎藤勇学長はそれを全学集会でなさいました。いつもなされた。

湊 今は全学集会はありません。

叶谷 私たちはこれを1年間かけてやったのです。

原田 私、これの現物を見るのは初めてです。

叶谷 私はこれを大事にして持っています。奥様も持っていられっやいますよ。我々の仲間は1学年で7、8人が学者になりました。この精神を背負ってね。

湊 何年ご卒業ですか。

叶谷 私は1961年です。

湊 私は1955年ですから、叶谷さんよりもっと前ですね。

藤原 これを習いましたか。

湊 もちろん。“*Our college is a Liberal Arts College.*”からね。

叶谷 そうそう。それでリベラルアーツが何たるかを叩き込まれたわけね。

藤原 私たちの時は、それを毎週1度、学長が全学集会でおっしゃった。

叶谷 この“*Our College*”を復活してくださいませんか。そのために私、今日来たのですよ。今はまず教授たちが知らないのね。東京女子大という自覚がないのよ。サラリーマンみたいな先生はいらないのね、この学校は。

藤原 私は敢えて申し上げますけれど、ここは並の女子大になってしまったというのが、今の冷静な観察です。並というのは、上中並とある並ですよ。

叶谷 そのために、「1922年」という礎石が埋まった東寮を研究室にして、先生方に入ってもらったらいいと、私も思いました。あの中で育てば、自ずとこの精神が先生方に浸透する気がします。

### <シンポジウムでの発言ダイジェスト>

藤原 「手触り」が大事ということを永井さんもおっしゃっています。このシンポジウム報告を、ちょっと皆さんにご披露したいと思って、昨日の夜一所懸命に付箋をはさんで来ました。私どもで開きましたシンポジウムに、ぜひ大学の関係者の方にお出でいただきたいとご案内したのですが、残念ながら一人もお出でになりませんでした。でも、とてもよいシンポジウムでした。

この報告の中の皆さんのご発言の中からさわりをご紹介しますと、まず永井路子さんがおっしゃったお話。10頁を見てください。活字とか写真で残せばよいというだけではなくて——下段の4行目です——「そういうことは紙に書けばいいというのではなくて、やはり『手触り』として現実に残すことが、非常に大きい意味を持っているのではないかという感じがいたします。私の経験として、残さないでよかった、という例は一つもありません。これだけは、はっきりいえます。残してよかった、あるいは残した方がよかったのに……のどちらかです」と。これは本当にその通りだと思います。

それから時枝俊江さんという、この方も映画製作で同窓会にも寄与していらっしゃいます。時枝さんが、13頁の体育館の写真の下段でお話しになっているのですが、「ゆるやかな強制されない、キリスト教的な雰囲気というものが、somethingという中に含まれている気がするのです」と、それで「そういうことについて、ライシャワー理事、それから新渡戸学長、安井学監、歴代の先輩の方たちとともに、レーモンドさんが形を与えてくださったということを、今、とてもありがたく思っております」とおっしゃっています。

藤岡先生と西澤先生は、それぞれ建築史と構造がご専門の方々です。藤岡先生はいかに豊かな建築デザインがなされたかについて、「北米のプロテスタントの方々を中心とする募金。これが他の日本の学校にはなかった条件です」と、15頁の上段でおっしゃっています。私立の女子大学で、しかも寮を鉄筋コンクリートでやったということは、その当時は破天荒なことだったとおっしゃって、この記録的なモニュメンタルなものを残していただきたいと、学者としてもおっしゃっています。

それから西澤先生は、京都大学の建築構造学がご専門の方ですが、ちょうどこのキャンパスで第一期の建築をしている真っ最中に関東大震災が襲うわけです。24、25頁です。25頁の図をご覧になりますと、関東大震災ではマグニチュード7以上の地震が頻発しているのがわかります。寮はその中でビクともしなかった建物であって、それを今更、耐震がどうの、学生の安全がどうのというのは、建物に対する冤罪である、とはっきりとおっしゃっています。この先生は舌鋒鋭くて、聞いていて「へえ」と思うことがたくさんありました。

レーモンド氏はフランク・ロイド・ライトを師としていますが、そのライト氏も耐震建築では日本で信頼を勝ち得た方ということです。そして31頁の下段から32頁にかけて、「『神戸で潰れたのは、実はすべて戦後の現代建築だった』ということです。逆に戦前の建物は一棟も壊れていない。戦争で爆撃を受け、猛烈な都市火災を受けたような古い建物が壊れていないのです」。さらに言えば「広島に原子爆弾が落ちましたが、被爆直後の爆心地の写真を見ますと」、というのは上段の上の写真ですね。「戦前のRC（鉄筋コンクリート）造の都市建築はまず一棟も破壊されていないのです」。しかも爆心地のRC造の小学校では、終戦2年後に運動会を開いているという写真がその下に載っています。それから日銀の広島支店等など戦前の建物が今でも使われている、とおっしゃっています。

戦前の建物だから、耐震基準が違うからダメだということは絶対に言えないのだということを、縷々おっしゃっています。私はそれを聞いた時に、本当に「目から鱗」という感じがいたしました。

それから36頁の煙突の写真があるところです。キャンパスに最初にこの東西寮を建てて、先生たちの住宅は建てないで、先に学生のための校舎と体育館を建てたと。時枝さんは大変冷静な方なのですが、そこまでお話しになると改めて感動なさって、涙ぐまれてしばし言葉を詰まらせていらっしゃいました。「それで外国人の先生たち三人ぐらいは、しばらく東寮の部屋にお住いになった。それから外国人教師館と学長宅を建てた。そしてライシャワーさんは、東西寮を建てた3年後、1927年にご自身が住む理事宅を建てられたのです。そういうふうには、学生のための建物を最優先なさった。ということは、いかに寮生活が成長期の女子に大事かということ、ライシャワー理事も新渡戸先生もお考えになったということです」とお話になっています。

そういうことが話されていますので、どうぞ、後でぜひこの報告を読んでいただきたいと思います。また38頁の上段から下段にかけての部分ですが、西澤先生が「何か気合いとか思い入れのある建物は、さり気なく見えても『うっ』と鳥肌の立つようなものがあります。嫌々建てたものとか、どうしてもええわとか、儲けたろうと思って建てた建物とは、伝わってくるものが全然違うのです。そういう建物に対して、『冤罪』を与えるようなことを言われると、僕は一言いたくなる」と、かなりズバツとした物言いでおっしゃっています。それを聞いて私たちも目を開かれました。

それから40頁。寮の外壁に埋め込まれた礎石の写真で、1922年と刻まれています。そこで参加者の一人の方のご発言ですが、そういうことを知った上で、「維持補修費と解体費とどちらが多くかかるのか、きちんと数字を出して考えたいと思いますが、それは無理でしょうか」というご質問でした。が、これに答えられる人はいなかったわけでございます。そういう基本的な疑問というものを、私共はもっております。

それから43頁、老朽化、安全の定義ということに問題であるとして、下段あたりの藤岡先生のお話です。「『老朽化』の定義が曖昧なままで話が進む。『安全』という言葉もそうです。特に阪神・淡路大震災以来、これを一つの錦の御旗にして『危ないから、壊さなければいけない』という話がよくあります。しかし100パーセント安全でもなければ、100パーセント危険ということでもありません。それをどのくらいのレベルで設定して議論するのか。実はそういう話はほとんどなされていませんし、『耐震診断』なるものも、いろいろな仮定に基づいてなされるもので、その仮定を変えることによって『危険』とも『安全』ともいえる場合が多いのです」と、非常に含みのあるご発言がありました。

44頁の上段、これは私も同感なのです。レーモンド建築はアメリカからの寄付によって建てられまし

た。記録によりますと当初の建設費は93パーセントが寄付なんですね。「日本人の道義心には『人からいただいたものは粗末にははいかん』』ということがある。自分で働いて得たものだったら捨てても、あるいは致し方ないこともあります。自分が働きもせず人様からいただいたり、託されたものを捨てるなんてことは、絶対にやってはいけません。だから、そのようなモラルを欠くことに対して、誰でも寝覚めが悪いと思います」。

それから兼松絃一郎さんは、シンポジウム全体のコーディネートをなさった方です。麻布の国際文化会館のコーディネーターもなさいました。国際文化会館の理事長——もと三菱銀行頭取の高垣さんです——にお会いになった時に「これを壊したら汚名が残りますよ。だけどここで理事会決議をひっくり返して保存すれば、すばらしい歴史上の人物になる」ということをおっしゃった。で、そのことが心に残って、理事長として理事会決定を覆したというお話です。これは朝日新聞で大きく報道されましたので、私も記事を読みました。そういうことのきっかけを作ったのが兼松さんだったというお話がありました。

そして最後に永井さんが、シンポジウムの締めくくりでおっしゃったことですが、「これを何とか具体的な形で大学の方に伝えたい。決して理事長さんを責めるのではなくて、文化遺産を守った大偉人になる可能性もある話ですから、もう一度考えていただくチャンスがあるのではないのでしょうか、ということをお願いしたいと思います」と。これは45頁に載っています。

そういうようなシンポジウムでありました。今、お読みしたのはその中からピックアップしたお話だけなので、後でお読みいただけましたら、ありがたいと思います。すみません、一方的にしゃべってしまいました。

### <チェコキュビズムが生きた姿で残っている>

**叶谷** 私は何もわからないものですから、レーモンド建築見学会とこのシンポジウムと両方に出席しました。レーモンド建築見学会というのは、あの女子大と後援財団がタイアップして開いた公開講座です。その時に日大の大川先生がおっしゃったことですが、外国人教師館と東寮が特にチェコキュビズムの生きた姿で、チェコ本土でもきわめて珍しい。それが現在でも使われているということは奇跡に近いとすごく褒めてくださいました。外国人教師館の外壁にある幾何学模様。東寮の場合は外壁に三角の柱の線を浮き出させてリズムを取っていること。平坦な壁ではないのがチェコキュビズムの表現なのだそうです。

それで、ライシャワー館や安井記念館は、大学としては非常に価値のあるものなのだろうけれど、建築史的には外国人教師館と東寮に価値を感じる。そして今や全国一律的の蒲鉾型の体育館ではなく、美術館のような体育館を持っている。体育館ではレーモンド独自の工夫がなされ、グランドレベルを3段下げて周りの建物とのバランスをとり、非常に美しい。どうぞ大切になさってください、と言われました。

**堀地** 寮というのは、最初は全寮制ですよ（→注2）。だから場所もそういう所に作ってあったのです。それで個室にして。確かに寮としては極めて特色がありますよね。で、建築史的にもそのように言われていることを、私もよく聞いています。ただ現在、あれを寮として使うということは……。

**叶谷** それは全然不可能です。

**堀地** それで今、お話を聞いていて、今までは用途のお話がなかった。それで研究室に使うというお

話は初めて伺ったのですが……。

藤原 前回もちょっとふれましたね。研究室またはセミナーハウス、あるいは交流室として使えないかと、申し上げた記憶がありますよ。

堀地 そうですか。しかし用途をはっきりしなければ、あの建物をどうやって保存するかということが決まらないのです。

叶谷 お金がかかることも考えないと。あるいは寄付を集めるとか、募金をするとか。

### <9つのレーモンド建築を残してこそ>

原田 建築史上の問題と精神的なものとか、そういうものが大切であることは、私も含めて皆さんわかっているのですよね。もう一つ、今回の整備計画で一番重要なことは、学生数4000人になりましたね。それで建て増し、建て増しして教室を作って来ました。私自身になるほどと思ったのは、学生が授業が終わった後やお昼の時間とかに、出て来て休む場所がないのです。それから安全上何か問題があった時に逃げ出せない。そういう問題があって、ある種の空間が必要だという話。

それから問題が起きた場合の動線。緊急車両とかが入るための道等の対策がないとか。これは大学としては大変重大な問題だと思うのです。そういうことのためのスペースを作りながら、なおかつ今まで作り上げた建物もありますから、そういうものも無にしないでほしいと。そういうところで、ギリギリいろいろな角度から見当した結果です。

レーモンド建築9つすべてを残さなければいけないという考え方もあるかもしれませんが、少なくともこの大学として、7つの建物は保存していこうと考えているのです。

叶谷 BSジャパンで浅井慎平と東大教授の藤森照信が、本館の前に小さな椅子を置いて2人で対談なさいました。ご覧になりましたか。素敵でしたよ。

原田 浅井慎平さんという人は、私も前から知っています。素晴らしい方ですね。

叶谷 私、DVDを録りましたので、よかったらお貸しします。

原田 あの空間は、私はぜひとも守りたいと思っています。1997年ですか、文化財に指定していただいた段階で——もちろん、9つ全部やっておけばよかったということはあるかもしれませんが——この大学でどうしても残したいことを、大学として決められたのです。

藤原 ですから前回、それをお尋ねしましたね。その経緯はどういうことだったのでしょうかと。記録がないとおっしゃった。

原田 いろいろ考えましたが、当時の状況として大学の基本的な物の考え方と言いますか…。それは寮もあるでしょう、体育館もあるでしょう、見識学識あるでしょうけれども、この限られたスペースを最大限活用し、将来キャンパスを整備していく中で、残すべきものとそうでないものを分けなければならぬ。それを当時、考えられたと思うのです。そして東寮、西寮はいずれも寮としては機能しなくなった段階で、西寮は壊したと。それから東寮も廃止された。あれから何年になりますかね。

湊 1984年ですから23年です。

### <閉寮・西寮解体時の状況>

原田 22年ですか。当時から西寮は壊されたけれども、東寮は残されたという経過があると思います

が、その間、それらの残そうという運動がどうしてなかったのだろうか。

**堀江** そのことを前回、理事長から提起していただいて、私も「ああ、なるほど」と思ったのです。そこで当時の東西寮の寮監の方々とかに聞いてみました。それでわかったのですが、当時、レーモンド建築を残そうという意識はあまりありませんでした。だから当初、寮はすべて壊されるものだと受け入れていました。『東西寮六十年』という寮を記念する本が出ています。その寮史の最後を読んでいただくとわかるのですが、これで形はなくなるけれど、私たちの精神は消えないというしめくりになっています。

**原田** あそこにプレートがありますね。

**藤原** あの文章は私が書きました。

**原田** あの段階で……。

**堀江** その段階ではぜんぶ壊すつもりでいたのです。だから、東寮が残ることになってびっくりしたと。どうして東寮が残ったのか、一説にはどうやらお金が足りなくて、壊せなかったとか、そういう理由があったらしい。

**桃井** あの本の隅谷先生の序文を読んでいただくと、やはり保存の声も上がったということで、残ったということです（→注3）。

**堀江** そう書いてありますね。

**原田** 活かせるものなら、何とか活かしたいという気持ちがあったかもしれませんね。

**永井** でも今、東寮が残っているという事実。

**堀江** 神の御心というのか。あの時に壊されていたら今はもう無かったものを、何でか残ったのは神の御心ではないかと。そう考えたくなるのは東女生としてのノスタルジーかもしれませんが、あの時、当初は全部壊す予定だったのに残ったのですから。

### <コンクリートの中性化／表慶館の復活>

**堀地** いずれにしても東寮については、用途をはっきり決めなければ計画が立たないのです。ですから今言われたことを考えてみますけれど、私は大変問題があるように、直観的に思います。それは要するに、個室というのは間仕切りが小さいでしょ。研究室にはだいたい20平米ぐらいがいるのです。それから高さ、天井が高いわけですから、それもやらなければいけない。

それからもう一つは老朽化。老朽化の話については、我々もずいぶん検討しているのです。何回も専門家に検討してもらっているのです。あの建物は確かに大震災にも耐えたのだけれど、コンクリートの中性化というのが大変進んでいるのです。これははっきりと調査にあります。中性化が進みますと、中にある鉄筋が腐食していくのです。

**叶谷** それが全然ないと西澤先生はおっしゃる。

**堀地** いやいや、それは全然違います。それは調査にあります。

**藤原** お話の途中に口を挟んで申し訳ありませんが、表慶館のことです。上野の東京国立博物館の中に入りますと、左手にある古い西洋風の建物があります。それが表慶館として、この間新しくお目見えしました。あれは明治41年の竣工なのです。それこそ地震にも耐え、空襲にも耐え、そしてずいぶん老朽化していると言われていたのだけれど、今回リノベーションして、中をきれいにお掃除して、屋根も

ちゃんと葺き換えて復活した。その記事が先週の土曜日の日経新聞の「春秋」という欄に出ています。これは今非常に話題になっているのですが、その展示を見ると、優れた建築家と腕のよい職人と、良質の材料と三者そろえば、時代がこれだけ経って変わってきても、びくともしないことが証明されたと、そういう言葉でちゃんと表示されているそうです。私はまだ行っていませんので、近いうちに行って来ようと思っています。

**桃井** 藤原さん、これが昭和54年に清水建設がコンクリートの調査をした時の写真です。中性化が進んでいる部分が赤くなっていますね。こういったところがほとんど至る所にあるという調査結果が出ているのです。この写真はみんなそうです。

**叶谷** 中性化では鉄筋は腐食しないのだそうですよ。酸化しないと腐食しない。しかも昔のコンクリートは手で切り返してこねまして、今のようにミキサー車で混ぜるのではありませんから、コンクリートの中に空気が入っていないので、酸化しないのだそうです。それだけ素晴らしいコンクリートなのです。

**田邊** 中性化と酸化は別なのです。

**堀地** いや、こういう調査もあります。

**叶谷** でも中性化というのは恐くないと、建築構造学の先生が言っていました。それで鉄筋は今でもピカピカのはずですよ。中性化しても鉄筋は腐食しません。

**藤原** なぜ表慶館の鉄筋は腐食しなかったのでしょうか。

**堀地** それは構造がまったく同じかどうかわからないから。

**藤原** でもあれは明治時代に鉄筋コンクリートで造っているのですよ。

**堀地** 鉄筋をどういうふうにしたかとか、いろいろありますから。要するにそういう技術的な話になると、専門領域の話ですから、我々も「こんなのは信用できない」と言われれば……。

**叶谷** 私も素人ですから、丸々信じてしまう質ですから、「そうかあ」と思ってしまったのです。構造の先生が、シンポジウムのおっしゃったことです。

**堀地** ああ、そうですか。この報告に書いてありますか。

**藤原** 書いてあります。後でお読みください。(→注4)

**堀地** よく読みます。

#### <報告に対する検討と回答／双方の専門家の討論>

**永井** この保存の議論はすれ違っていると思います。寮と体育館について、今おっしゃいましたのは「もう老朽化していて、保存活用は無理だよ」という話でした。が、ここにこういう報告が出ましたので、またそれはご検討いただきたいということです。all or nothingではなくて、こういう話もありますよということで、ご検討いただいて、また次の機会にご返事をいただくと。その場合には、もしできましたら、そういうご専門の方と両方でお会いになって、その結論を私どもがご拝聴できれば、これは一番納得できることです。

そういうことと、寮と体育館をどう残すかという、つまり私たちが望んでいる、形のあるものを残したいという気持ちとは、ちょっとそこで問題がずれていると思います。私どもはそういうふうにいるということです。

そして私どもは決して湊先生たちを非難しているわけではない。それをよくご理解いただきたいと思っています。湊先生の時にこれを壊したのだ、ということにならないように。湊先生が卒業生として学長になってくださって、よいお仕事をいらっしゃいますから、そういう方の時にそういうことにならないように。これも女子大を愛する一つかもしれません。

古いからダメとか、精神的だから残せということには、すれ違いがありますね。それについて私どもがこれだけお話をして、それに対して大学あるいは理事会側のご返答と言いますか、お考えをいただく。もう一つは専門家方をお呼びして、もっとはっきりさせるチャンスがないものかと思っております。これはなかなか結論が出ないと思います。

それからもう一つ、私どもはここでいろいろご提案をさせていただきましたが、この前の時に、理事長先生は、あなたたちの言うことはよく理解したと。理解ということは同意ではないですよ。それは確かにそうです。安倍首相と温家宝首相との対談は面白かったですね。温家宝は「理解する」と言った。だけど目は笑っていなかった、口だけ笑っていて。こういうところを見るのが歴史小説家です。だから安倍さんは理解させたと言うかもしれませんが、それでは一步も前進にならないですね、そういう意味では。

私どもは理解していただいたというのは大変ありがたいと思います。理解については、まったくこれが鉄壁の計画でどうにもできないのか。いや、もう少し「こういうことも考えられるのではないか」と、理事会側から多少のご提案があることを期待しております。これが完璧な案だというふうに、みんな思うのです。失礼ですけど、どの場合でもそうなのです。例えば水俣病だって、(国や県は)最初ははねつけましたよね。それは法律的には間違っていないから、何でそういうことを言うのかなど。ところが話を聞いてみると、それではいけなかったなあと、今頃になって補償の問題などを言っていますでしょう。だから完璧に、まず結論ありきではなくて、何かお考えを……。少しでも「気持ちはわかる」ということがあれば、どういう形か。これは今この場だけで、決められることとは思えません。ですから次の機会までに、我々の申し上げたことに対するご回答をお考えいただきたい。

それからもう一つ、建築家のご討論をしていただきたいということです。これは私が今考えたことで、皆さんには諮っていないのですけれど、そういうことがあって初めて納得がいくのではないかという気がしております。

### <東寮を研究室棟に②——約80の研究室>

湊 私自身も卒業生ですし、東寮出身ですから、東寮があつてほしいという思いは、はっきり言って本当に大きいです。でもやはり、大学の中におりまして、キャンパス整備計画というのは、ハードの面では建物の問題でございますが、ソフトの面の教学の改革と並行して考えなければなりません。

短期大学部が1988年に今の現代文化学部になり、通算31年間牟礼に存在してのち、こちらに移って9年目でございます。ですからどうしても一つになるには、いろいろな壁を乗り越える必要があります。2学部できておりますのを、リベラルアーツの一つの傘の下でシャッフルしようということで、今本当によい方向で先生方が一つになって動いております。そういう中で、二つの学部が一つになっていますから、講座がたくさんあるのです。1085でしたかしら。それだけを全部開講しようと思すと、教室もたくさん要ります。シャッフルしてまいりますと、似通った講座は一つにまとめてもっと充実したもの

にできる。

そういうことをすべて考えながら、教室棟がどういうふうに使われていくか。大きな教室がもう少し必要である。それを受けて今度はハードの面でのキャンパス整備計画が、教室棟の方に反映するようにして下さっておられます。

今、3号館のお話が出ましたけれど、先生方の研究室が狭いのです。先生方の研究室をオープンにして学生指導もするという、いろいろなプロジェクトも組まれておりますので、もう少し広く20平米ですか……。

堀地 ええ。

湊 20平米にして、3号館に研究室は全部でいくつありましたかしら、80ぐらい……。

堀地 80ぐらいですね。

湊 私もちよっと考えたのです、研究室を移して東寮を残せないかと。そうしますと、あそこには80はできないのです。だからアーカイブにしたらどうだろうとも。この間も申し上げたように、それもむずかしいと。

藤原 80の研究室は一カ所でなければいけないのですか。分散はできないのですか。

湊 分散するにはまたもう一つ建てなければなりません。

叶谷 東寮の集会室を使えばいかがですか。100人ずつ入る集会室が上下階にありますよ。食堂と集会室です。あれを使ったらできますね。

湊 でもそれは、ちょっと研究室には……。

堀地 それはちょっと……。

藤原 ごめんなさい、横道に逸れました。

湊 研究室を東寮に持っていくこともできないでしょうし、先ほど理事長がおっしゃった、ハードの面の安全性とか、広いスペースも必要で、一つ一つ考えて参りました時に、やっぱりそこにスペースを作るしか、このキャンパスには場所がないと。教授会も納得して、今、この路線で動いているのです。

### <東寮を研究室棟に③——大学側の検討>

永井 中にいらっしゃる方々のお気持ちはよくわかりますけれど、外からこういう意見が今出ているということは、もう一度ご一考いただく条件にはならないでしょうか。ここで「なりません」とか「なる」とかいう結論をいただくわけではなくて、私どもがそういうご提案をしたことの意は、ここでこれだけお話したのではご理解いただけないかもしれませんから、それをちゃんと文書にして差し上げますから、それでご検討くださると。そのくらいの理解をいただければ、非常にありがたいと思います。

もちろん、安全とか、将来のことを考えるのもわかります。東寮と体育館は将来の問題でもあると思うのです。それをどういうふうを受け継ぎ、伝えていくかということ、一応ここで申し上げたわけですね。

もう時間が無くなりましたから、今日の総括です。理事長さん、どういうふうにお考えになりますか。

原田 皆さん方のおっしゃることは、私としてはわかります。ただキャンパス整備計画が決定をされる過程で、さんざんご意見を出していただいて、私は承ってきたわけです。そういうことで大学はもう決定の段階で、計画の一部はもう始まっているわけですね。しかも授業をやりながら、その合間を縫っ

て順序よくやっていかなければなりません。私どもとしては、全体のキャンパス計画の中でこのキャンパスについて、基本的な大学の建学の理念、歴史的な保存としては、相当程度配慮していると、私は思うのです。

あと皆さん方がおっしゃる精神的なもの、気持ちをどうやって生かしていけばいいかということについては、皆さん方だけではなくて、他の方々もいろいろ意見をおっしゃっていることもあります。もう少し記念になるような形で残したい、それをメモライズしていくものがあるよいいのではないかとということもあります。これについては別途、大学としても皆さんの意見を聞きながら考えていきたい。

**永井** 結論的に言いますと、今の大学の計画は完璧であると。

**原田** 完璧であるとは申しませんが……。

**永井** 完璧であるとは申せないですよ、よく聞いてください。しかしそれは最良の……。

**原田** 歴史的な、今考えられる中で最良のという……。

**永井** だけれど、完璧ではないと。それだけのことをおっしゃいました。私どももこの提案が完璧であるとは、決して思っていないですね。そのことを私どもも自覚しているということが結論です。しかし、こういうご提案をさせていただくということの意義を、理事長はお認めのようでございます。あとのお二人にもそれをご理解いただきたい。

**堀地** 理事長、せっかくそういう……。要するに、我々が非常に悩んでいるのは、例えば旧東寮と旧体育館を保存したいというお気持ちは、理事長が言われるように、我々もよくわかっているのです。できたらそうしたいのです。が、できないと……。

**永井** できないというふうに、今お考えになっているわけですね。

**堀地** いやいや、できないと思っていた。しかし、せっかくこういう具体的なご提案があるのだから、「この案に果たしてどういう問題があるか」ということは検討できると。

**永井** そうですね。そういう検討をする気持ちがある。

**堀江・大塚** ありがとうございます。

**永井** それは非常にありがたいことであって、門前払いではないということですね。

**堀地** ええ、そうです。それはそれこそ文書でお返事しましょう。どういう問題があるかね。

**永井** それにプラスして、今までの完璧というご決定について、プラスαで何かできないかということ、次に皆様方の方からご説明を伺わせていただくということに、希望をつなぎたいと思います。いかがでしょうか。

### <三菱地所設計のアイデア／3号館跡地の利用>

**堀地** 私は素人ですけれど、直観的に見てこの案は、問題はコストだと思います。それから用途を変えるということですから、用途を変えるということは、大変大きなコストがかかります。取り壊す理由の一つに、財政問題もあるわけです。それが果たして大丈夫だろうか。それから果たして使い勝手のよい研究室になるでしょうか。そういう問題があります。

**藤原** その点についてですが、三菱地所設計さんのアイデアと言いましょか——開発力は相当に大きいと私は思って評価しているのですが——お知恵を借りて、使い勝手のよいリノベーションを提案していただいたらいかがでしょうか。それは絶対に必要です。それからもう一つ。3号館の研究室が80室

ですか、ございますね。それを全部東寮に入れるということではなくて、3号館を壊したら、そこに新しい建物をお建てになったらいかがですか。そうことを私どもは言おうとしていたのです。5階か6階かわかりませんが、新しい建物ができれば、そこにまた研究室が戻ってくることもできますし、教室もできます。ですから、3号館跡地を利用すれば、敢えて東寮を潰さなくても、大学はスペースを確保できるのではないかと、ということなのです。

**堀地** しかし東寮を研究室にするわけでしょ。

**藤原** 研究室が戻るとするのは一部です。3号館を壊して建物を建て直している時に、先生方には緊急避難的に疎開していただかなければなりませんから、東寮を研究室に一時移転して。

**堀地** 将来的に東寮を研究室棟にするのですよね。

**藤原** 一部は移ってもいいでしょう。あそこは居心地がいいから残るといふ方は、東寮にそのままいていただければいいし、新しい棟がよい方には引っ越していただいてもいいし。

**永井** 研究室を分散するという事は、いろいろな大学にありますよ。

**藤原** 何もすべての研究室がいっしょにある必要はない。

**堀地** こういうことだと思います。可能性というのは確かにいくつかあるのです。だから完璧とか、そういうことではないと思います。いろいろな可能性はあるのです。ただいろいろな案について、メリット、デメリット、問題点というのがあるのです。それはわかりますね。ですからその一つとして、今ご提案になった案ができるかどうか。それはあまり専門的に時間をかけてやる余裕はありませんから、簡単な方法で結論は出ると思います。

## <専門家の意見②>

**田邊** つい最近、日本建築学会から保存要望書が届いたと思います。そして今日、午前中に日本建築家協会の方が保存要望書を届けにいらしたと思います。

**桃井** 私は不在でしたので、書類を置いて帰られました。

**田邊** 両方の保存要望書に、「以上のような理由から、旧東寮及び旧体育館を解体することなく保存活用し、9棟の建築群すべて貴大学及び地域の建築遺産として維持することを心より願っています」と、「そのためには自分たちもできる限り協力をさせていただきます」とあります。建築学会も建築家協会も、両方ともそう言うくださっているのです。ですから今日、私ども素人が研究棟にと言った時に、「研究棟ではダメだよ」という結論が出やすいと思うのです。が、それをもとにして、東寮を壊さないで研究室も確保する案を出していただいて、私どもにも、そして専門家のこの方たちにも見ていただくという形で、双方が納得できるようなお話し合いの計画をぜひ。

**堀地** この案というのは、誰かに相談されたのですか。

**田邊** まだ、まったくしていません。

**堀地** そちらだけで。

**田邊** 本当にど素人が、また中のことがわからない者が考えたことです。で、今お聞きして、研究室が80あるとなると、ちょっときついなと思ったりしました。ですから寮を壊さないで、研究室が足りないということをして……。

**湊** 教室も足りない。

### <キャンパス整備計画のビデオ／本館地階のスペースの活用>

藤原 私どもは情報を持っていないのです。今日、コンクリート調査の写真をお見せくださいましたけれど、初めて見せていただきました。その他、教職員への説明のために美しいビデオか何かをご紹介しますようですが、一度そういうものも見せていただいて、情報を共有した上で話し合いをする方が、さらに生産的ではないかと思います。それをぜひ今後お願いしたいと思います。

原田 あの広報ビデオといいますか、全体のキャンパス計画のビデオをご覧いただきたいですね。それはできていますか。

桃井 ええ、できています。

原田 そういう機会を。

藤原 では、いつかそういう機会をお願いします。

叶谷 学生が憩う場所が必要という意味では、私たちはよく本館地下のキャフテリアを利用しましたが、今は閉鎖になっていますね。

湊 雨が降って40センチも水が入ってしましまして、大騒ぎをいたしました。早急に補修を必要としています。

叶谷 教授食堂と学生食堂とが通路をはさんであって、とてもよかったですよね。三笠宮はキャフの方で狐うどんをよく召し上がっていましたけれど。

湊 修繕にかなりのお金がかかるでしょうね。

叶谷 でも活用しないと勿体ないですよ、大きなスペースですから。それから個室もいっぱいありますよね。

湊 ですから、それは整備計画の中にあります。

堀地 全部情報をお教えするというのは、時間もありませんけれど、皆さんがいろいろな声を持っていることを承知の上で計画を作ってきているのです。ですからそのプロセスについては、我々も一所懸命に考えて、専門家の意見も聞いて作っているのです。しかし、こういうことを具体的に言われると即答はできませんので、専門家の意見を聞いてどういう問題があるか。そういうことはお答えできると思います。

永井 私どもが体育館と東寮を何とか保存していただきたいという気持ちだけは、ご理解いただきたいと思うし、そのご理解というのは、門前払いではないということが一つでございます。その次はご理解したら、それについて何かのご返答というか、お考えをいただく余地をと、私どもは希望しておりますので、そのことをご理解いただきたいというわけでございます。

堀地 こういうご提案があったのは初めてですからね。

### <同窓会の協力／鳥山明子発起人の手紙>

永井 これで3時でございますけれど、今日はなかなか実のあると言いますか、お互いが腹を打ち割ったお話ができて、大変有意義であったと思いますし、これを打ち切りの場ではなくて、これから先に続けていく会にさせていただきたいと。これはぜひお願いしたいと思います。また、経費の点でございますが——この点は他の方々と話をしていませんが——これがもし経費が第一だということになった時には、私は同窓会に動いていただきたいと思います。同窓会はお金がないのです。日本女子大の桜楓

会というのはすごくお金を持っていて、こういう時には「ダメ」とか言って、お金を出すというけれども、それが東京女子大の場合はないのです。

**叶谷** 鳥山明子先生からのご伝言なのですが、先生が今日ご出席になりたかった理由は、1995年にオックスフォード大学に行った時、大学の先生がロンドンを案内してくれ、ダイアナ妃のご葬儀も行われた大聖堂が、戦争で一部破壊されたが、修復された。しかし廻りの建物は全壊したので金属とガラスの超近代的な建物が建てられた。住民が「それらの新しい建物は大聖堂にそぐわないから、それらを壊して元の建物を復元して建てよう」といって運動を起こして、そうすることになったということ思い出したからだそうです。「イギリスでは歴史的な建築物に建てかえ、復元しようとさえしているのに、東女に今ある、創立の精神を宿している建物を壊さないで欲しいと申し上げたかった」と言っておられます。

**藤原** 先ほど差し上げたお手紙です。鳥山さんからいただいたお手紙のコピーを取りまして差し上げていますので、ぜひ後でお読みください（→注5）。

**永井** 同窓会などでもう少し働いてくだされば、多少でも財政支援させていただきたいという気持ちはおありになると思いますよ。そういうことを同窓会にも伝えてほしいということでございます。

#### <保存活動が大学の信用を失墜させるのか>

**永井** それから、これは桃井さんに伺いたいのですが、この前のお手紙の中で「この運動を拡大することについては、本学の信用や社会的評価に悪影響を与え、多くの大学を愛する方々に不安感とマイナスイメージを与えることと、深く懸念いたします」とあります。このシンポジウム報告をご覧になって、東京女子大の信用が失墜したと思われませんか。

**桃井** そのことについては、先ほど話の出ました署名のことでも、全員が在校生・卒業生というように思われている。

**永井** それは誤解ですね。

**桃井** それ以外にも、かなり誤解をされているような手紙が、藤原さんを中心とした会以外の卒業生等々からいろいろな手紙が大学に来ているのです。それらを読みますと、いろいろな点で誤解をされていることが多分に見受けられるのです。

**永井** それはわかります。ただこの一点について、お伺いいたします。信用を失墜させるような集まりでしょうか。

**藤原** 私たちが信用を失墜させていますか、とお聞きしています。

**永井** この集まりが信用を失墜させ、マイナスイメージを与える集まりであると、ご認識なさいませんか。

**桃井** そういうことは、正直言ってあります。

**永井** あります。どうしてですか。

**桃井** いろいろな方とのやりとりで……。

**永井** いろいろな方ではなくて、この問題です。

**桃井** いやいや、そういう手紙とか、言葉のやり取りを受けて、本学の教職員たちもかなり動揺をしているのです。周辺の方たちからもいろいろなことを問われているのです。

**永井** 私は本質的なことを伺います。そういう日本語の使い方は、私はよく知らないので、信用を失墜させたこととは何でしょう。具体的におっしゃってください。そして私に理解させてください。私は法律のことは知りませんが、例えばありもしないセクハラが女子大であったなどと週刊誌に流す。これは絶対にいけませんね。金の使い込みとか、不正使用をしたということ、ありもしないのに言ったら、これも信用を失墜させる失礼なことです。そういうことです。一般的にいろいろあるからということではなくて、この信用の失墜という一点に限定してお返事していただきたい。これがそれほど信用を失墜させているのですか。

**堀地** 信用失墜かどうかは別として、整備計画というのはスケジュールを決めているのですよ。

**永井** はい、それはわかります。でも、そういう問題ではなくて……。

**堀地** いやいや、いいですか。そういうスケジュールを公表しているのに、なぜそういうふうに進まないのですかと。今、藤原代表がやられている会のご意見以外では、そういう声はほとんどないのです。原案で大変よいという声が非常に多いのです。その中でこの問題にかかわって長い時間を費やすというのは、お互いにあまり賢明ではないと思います。

**永井** いや、私はこの問題について、限定してお伺いしています。それ以外に、どういうことが信用を失墜させることになるのか。そういうことの運用方法といいますか、信用を失墜させることを意図してやったこと、信用を失墜させようと思って始めたがまだやらないこと、これもいけませんね。それから信用失墜しようとしたわけではなくて、結果的に信用を失墜させたこと、これはどうですか。

**原田** 信用云々の問題以前に、私自身が「大学で何しているのですか」と。要するに「皆さんが提起なさることをまったく無視して計画したのですか」というような不信感を持ち始めている人がいっぱいいるのです。

**永井** そういう人たちにはご説明ください。

**原田** しました。実はそうではないのです。大学としては、そういう問題もいろいろな角度から検討しました。建学の精神から、9つある建物についても7つについては、しっかり守っていきましょうと。それと同時に、キャンパスを現在および将来の学生のためにいいものにしていって、大学間の競争だけでなく、この大学が将来に向けて日本の女子高等教育のために旗を立てていきたいと。そのためには精神だけでなく、キャンパスが必要です。そして学生が魅力をもって、あの大学に学びたいというようなキャンパスを作り、それにふさわしい教授の陣容を整え、大学を作っていかなければいけないと。こういうふうに私は思う。そういうものに対して、あのまま9つの建物を残さないことで、すべて水泡に帰してしまうような形で取り上げておられることについては、私どもは大変当惑しているのです。

**永井** そうですか。そこのところが大学の方と、外から見て保存していただきたいという見解とのズレだろうと思います。それがすなわち信用を失墜することには決してならない。このシンポジウム報告をよく読んでいただきたい。女子大の悪口など誰も全然言っていませんよ。よい学校だ、惜しいということですから、この保存運動を拡大することによって不安感とマイナスイメージという言葉は、できれば取り消していただきたい。

**原田** 例えば、シンポジウム報告の最後の日本大学の先生の閉会の挨拶ですけれど「実は最初にこのキャンパス整備計画の図を渡された時、私は少し腹を立てました。なぜかと言うと、右の下の方にユニバーシティ・シンボルゾーンと書いてあります。その上がメモリアル・フォレストゾーンとあります。

ところが寮のところには何も書いていません。私は永井先生と同じ一九二五年生まれで、旧制高等学校の寮生活をしております。この旧制高等学校の寮歌祭が長年続いて、ついに先年幕を閉じましたが、そこまで続いたわけは何かと言いますと、寮での生活がいかに人格形成、そして個性を生み出すのに役に立ったかということです」(→注6)と。

私はその通りだと思います。しかし一高とか三高とか、昔の高等学校の寮生活を今持ち込めと、そのままの姿を残せ、建物を残せということを主眼として、この運動を進めているように見えるのです。

**永井** なるほど。それは誤解ですね。

**原田** いや、誤解かどうか知りません。最後の総括にそう書いてある。そこは今この大学で研究をし、授業をする教職員や、勉強している学生たちも含めて、大学としては私がここに着任する前から何度となく意見を聞き、アンケートをし、それを集約してきた。その流れの中で与えられた財政、与えられたキャンパスの姿、そういうぎりぎりの中で計画を立てられたのだと、私は思っています。ですから、大学が一切意見を無視してこの計画を押し通そうとしているということで、昔の9つの建物をそのまま残せ、一步も引けないという運動は、大学の執行部当局側に対して大変な問題を提起しているということ、どうぞご理解いただきたい。

**永井** そしてそれが、中でお考えになって最良とお考えかもしれないけれど、いろいろなもの考え方があるということ、ここでご理解いただいたわけですね。ご理解ですよ。もっともと言わないかもしれないけれど、とにかくご理解いただいたと。

**原田** もっともだと思ふところはあるのです。皆様方は……。

**永井** ただ、それを何か言ったことで、大学のイメージが失墜するなどは思わないでいただきたい。私たちは真剣に、大学を愛するゆえに、最もよい方向に行きたいと思うからこそ、言っているのです。それを信用が失墜するというようなことを言うのは、つまりジャーナリズム的な観点と言いますか。私たち自身はそういうことではないということ、もう一度くどいようですが、桃井さんにご認識いただきたい。私たちは決してそういうつもりでやっているわけではない。

**桃井** 永井先生のおっしゃることはよくわかりますし、大学を愛することでも一致はしていると思います。ただ今回の一連の動きの中で、個人に対しても大学に対しても、誹謗中傷というものが非常ににはなはだしく起きているのです。

**永井** それは具体的にも私どもは何っていませんし、私どもとは関係のないことです。

**桃井** それは公にできないこともあるのです。事実確認もできないうちに、そういうことは公にできません。ただそういうことが起きているということ、一連の動きの中で起きたということについては、ぜひご理解をいただきたい。

**永井** そういうことがあっても、私どもはそういう本旨ではない。

**藤原** それは便乗ですよ。私たちは利用されているかもしれない。それは事実として……。

**永井** その辺りは区別してお考えくださいということです。

**桃井** それはよくわかります。

＊

**永井** ところで、聞くところによると理事長さんは三菱銀行の……。

**原田** いやー、三菱UFJフィナンシャル・グループの社外取締役です。

永井 ね、そうでしょ。皆さん、お聞きになりましたか。この方は偉い方なんですよ。そういう偉い方に一声「理事会決定を考え直す」と言っていただければ、これは鶴の一声でもって、実はいくらでも話が運ぶのではありませんか。

原田 いやいや、そういうことは……。

堀地 そういうことは、まったくいけませんな。

永井 それはそうですけれど、麻布の国際文化会館の件でも、すでに理事会で取り壊しが決まっていたところが、新しく理事長になられた方が三菱銀行の元頭取で、その偉い方の一声があつて取り壊しがひっくり返って、保存再生ということになったと伺っています。こちらの東寮と体育館の話も、理事長のような偉い方の鶴の一声を持ってすれば、パッと解決がつくではありませんか。

一同 ぜひお願いします。

堀地 そういうことは、あり得ない話ですよ。

原田 いや、私はまた永井先生が、私とその取締役なので三菱に儲けさせているとか、そういうことをおっしゃるのかと思いましたよ。そういうお話とは……。いや、それはできません。

永井 そうですか、できると思うのですが……。

堀地 そういう話は不謹慎ですよ。

#### <時代の流れとともに価値観も変化している>

藤原 1997年の時点で、9つのレーモンド建築のうち、東寮と体育館が外されていたことを知らずに来てしまったことには問題があったと、今つくづく思います。今言っても仕方がないけれど。

湊 私も97年の時点では、ここにおりませんから。

堀地 97年に戻って議論したら、同じ結論になるかもしれませんよ。

藤原 それはわかりません。

堀江 世の中の考え方が動いていると思います。だから97年の時点であれば（閉寮の時点でもそうですが）、これほどの議論が起きなかったのではないかと。それが10年経った今、世の中の気運も変わっているし、価値観も変わって来ています。そういう中で「価値ある建物を残さなければいけない」という気運が高まっているという、時代の流れもあつて状況は刻々変化している。我々は未来に向かって生きていかなければいけないのですから、今現在の状況をここでもう一回見直してもらいたいという気がするのです。理事の方々もずっと関わってきて、皆さん年々努力なさっていらした。だからその上に立っているがゆえに、今、見えないものもあるのではないのでしょうか。我々は今の息吹を受けて、今現在の目で見えて提案しているのです。だから今、新しい提案を……。

堀地 いや、97年の決定のお陰でいろいろな選択肢が増えたということが言えると思います。あれをそのまま保存しなければいけないとなると、選択肢がえらく狭まりますよ。

永井 やはり10年の時代の流れということは……。

堀地 私はよく考えられた案だなと思いますよ。

永井 お気持ちはわかります、理解いたしますが……。

堀地 考え方というのは、みんな違うのですよ。ですから今、堀江さんがおっしゃるように考えない人もたくさんいるのです。そこが難しいところです。

### <署名簿の取り扱い>

永井 私どもの提出した署名をどうお取り扱いですか。

桃井 こちらで保管しております。

湊 きちんと理事会に報告して、お見せしました。

永井 そうですか。これだけの方から集めたものですから、皆様にその行方をご報告しないとイケませんので。よもやお捨になるようなことはないと思いますが……。

桃井 そんなことはありません。ご心配でしたら、ここにお持ちしてお見せしましょうか。

藤原 いえいえ、それには及びません。きちんと受け取っていただいていることが確認できれば結構です。

### <7つか、9つか、建物保存の評価>

湊 12月2日のシンポジウムでは参加者の先生が、私どもが7つのレーモンド建築を登録文化財として保存しようとしていることを高く評価してくださったと聞いています。実際、文科省の方でも評価していただいています。これは文科省が発行している「教育通信」という雑誌です。この中に「大学の文化財」という欄がありまして、さまざまな大学の文化財保存の努力が紹介されています。普通は一つの号で紹介されるだけなのですが、東京女子大のレーモンド建築の場合は四つの号にわたって連続して紹介されているのです。

こうしたことがあるものですから、シンポジウムで指摘していただいた「7つも残している」という表現はこれと一致すると思ひまして。

藤原 それは私どもも聞いております。

叶谷 そのお話は最後が抜けていますね。「7つを保存して下さっていますが、あと2つも是非保存して下さい」とおっしゃったのです。内田先生はそこまでおっしゃいました。(→注7)

湊 ああ、そうなのですか。途中なのですね。

堀地 いろいろな意味があつて、「7つも」という意味があるわけですから。

叶谷 でき得るならば、あと2つもということでしたね。

堀地 しかし選択肢はものすごく狭まりますよ。

湊 でもこれは、私、大変感激いたしました。

叶谷 そのご発言の方が「書類を持って伺います」とおっしゃったのです。そうしたら「郵送してください」と言われた(→注8)。

湊 ああ、そうなのですか。

藤原 そうなんですよ。せっかく行きたかったのに、来るに及ばずと言われたと。内田青蔵先生です。

田邊 9つ揃っているということが本当に貴重なのですよね。

藤原 そう。9つ揃っているということが重要なのです。

堀地 7つもすごいですよ。「よく7つもやれますね」と言っているじゃないですか。本当にそうですよ、大変な努力ですよ。

### <牟礼との併合後>

湊 1万人の卒礼の卒業生の方がおられます。このキャンパス整備計画は、卒礼の譲渡のお金があつてこそはじめてできますので、やはり「卒礼の心を、心の卒礼に」という言葉が私には響いているのです。それを何とかして、今のキャンパス整備計画の教学部分の「一つにする理念」と合一させながら、ここのキャンパスに具現化できないかと思っています。それに東寮と体育館が加われば本当によいのでしょうけれど、建物を建て、学生たちのためにスペースも獲得しない限り解決できないことがありますので。

叶谷 将来的に学生数が減るということはありませんか。

湊 ないですね。

叶谷 人口が減ってもですか。

藤原 若者の数が減ってきていますね。

叶谷 卒礼といっしょになったのは80周年の頃でしたかしら。その時に3つぐらい建物を建てましたね。

堀地 4つです。

叶谷 図書館と体育館の前の建物ですね。それでは足りないわけですか。

藤原 その時から学生さんは何人ぐらい増えていますか。

原田 いっしょになった時から、一番のピークは2002年くらいだと思います。その後減って、今、減っているのですね。減っているけれども、学長が言われるように、これ以上減ってしまったら経営が成り立たなくなりますからね。ですからほぼ4000人。

桃井 博士後期課程も設置しましたから。

原田 今の数を維持していけるかどうかはわかりません。わかりませんが、今から学生数を少なくしていく計画を立てるということはできない。女子高等教育でこれだけの業績を残し、これからもやっていきたい。そのためにこれだけの学生さんの数は維持していきたい、というのが私たちの理論です。しかし厳しいですよ。その中でキャンパスをきれいにすると同時に、中身を充実させないと。

叶谷 教学が問題ですね。内容のあるものに。

原田 本当に数年のうちに、学科も整理しようと動き始めた。

湊 今までずっとできなかったのです。

堀地 そういう面でまたいずれ、この問題は問題としてまた関心を持って、建物だけでなく中身についてもご理解していただきたいし、協力していただきたいと。

湊 リベラルアーツを充実させたい。

叶谷 受験生は大学案内を見て、どんな科目があるか、どんな先生がいるかということで希望してくるのですね。

湊 どういう学科があるか、どういう専攻があるか、何ができるか、それがよく見えるように今、変革しております。

叶谷 そうですね。

\*

堀地 もう時間ですので。

藤原 そうですね。ごめんなさい、時間をオーバーしました。ありがとうございました。

\*\*\*\*\*

- 注1) 2006年7月10日に藤原代表が田邊会員と、大学からの要請で原田理事長他と懇談。ただし、この折にはまだ東女レーモンドの会は成立しておらず、「卒業生有志の会」の代表として出向いた。東女レーモンドの会としての懇談は、11月10日に続いて今回で2回目。
- 注2) 善福寺キャンパスの全体計画の模型を見ると、当初、寮は6棟を予定していたことがわかる。1棟100人とする600人が入寮でき、アメリカ式的全寮制大学を計画していたと考えられる。が、実際に建設されたのは東西寮の2棟だけであり、全寮制にはならなかった。
- 注3) 「当初は新寮建設後東西寮は取り壊す計画であったが、その後色々考慮して、東西寮の何れかと中央のボイラー室とは、当分保存することとした。それは旧東西寮在寮の方々の思い出のためという点もあるが、前述したように、日本の建築史上記念すべきものであること、生活の場としては寿命が来たが、多少の補強工事をすれば他の用途には使用可能であるという、建築専門家の助言を生かして、これを学生のサークル室として改造・利用しようとするに至ったからである」(『東京女子大学東西寮六十年』隅谷三喜男学長の序文より)。ただし、同書「はじめに」には、「建物は外観こそ歳月の重みを感じさせながらもまだまだしっかり建っているように見えるが、すでにコンクリート建築の耐用年数をこえて細部の損傷が著しくなり、若人の生命をあずかる安全性の面からも考慮されて、一年後には取り壊されて近代的な新しい寮に建て替えられることになった」とある。
- このように『東西寮六十年』には、隅谷学長の序文と、「はじめに」や本文の記述には食い違いがみられる。当時のこの結論は、関係者の話し合いによって得られた総意ではなかったことが窺われる。
- 注4) コンクリートの中性化のことは、西澤英和先生(京都大学・建築構造学)が、シンポジウム後の懇談の席で話されたことなので、シンポジウム報告にその記載はない。当会のホームページ<http://homepage2.nifty.com/twcu-raymond/> 特別寄稿：西澤英和氏「“老朽化”と“中性化”の誤解」参照。
- 注5) 「(前略)東京女子大の今回の問題を考えながら、私は一九九五年ロンドンで経験した事柄を思い出しております。オックスフォード大学の教授クーパー氏に案内されて歩いて居りました節、あのダイアナ妃の葬儀が行われました大聖堂のところに来ました時、教授の話に私は言葉を失いました。それは大聖堂の周辺はドイツ空軍の空襲によって破壊され、大聖堂は一部のみの破損ですんだそうでした。私が参りました時は、大聖堂の周辺には超近代的なガラスと金属でできた高層ビル群が林立しておりました。それらのビルは築四、五年ということでありましたが、その周辺に住む人々の中から、超近代的建物にかこまれた大聖堂の景色は見るにたえないという声があり、せっかく新しく建てられたビルをとりこわし大聖堂の建てられた時代の外観をもつ建物(内部は近代的設備をもつ)に建てなおしてほしいという住民運動が起こっているという話でした。『しばらくしたらここは昔の姿をとりもどすことになるだろう』とその教授は私にいわれました。『もしこれが日本でのごことであつたら、まさに狂気の沙汰として一蹴されてしまうでしょう』と私が申しましたら、教授は『こういうことが本当の文化というものだ。戦後はどこの世界でも経済的なものが優先して文化の問題は軽くあつかわれる傾向がある。文明が文化を押しつけ

るのを見るのは残念なことだ』と言われました。

日本と英国では考え方も事情がちがうといわれればそれまでですが、今、私たちの大学の問題を考える時、私はこの時の教授の言葉が忘れられないのです。

これからどのような方向に事が進められましようとも、関係各位の賢い御配慮により東京女子大学が将来に決して悔いを残さないような道が開かれますことを祈り願うものでございます。」

(1943年英専卒・鳥山明子発起人の、原田理事長・湊学長あて手紙より)

注6) 理事長が読まれた部分に続いて「(中略) ところがこれ(補注: 2013年度のキャンパス整備イメージ)で見ると、校舎方だけがシンボルゾーンになっていまして、先生方のお宅があるところがメモリアルゾーンになって、肝心の寮がメモリアルゾーンに入っていないのです。これを見れば、今の理事たちの理解の程度がはっきりとわかる。これでは困るのです。寮がある限り、寮というところが大学教育の中でどれだけの価値を持っているかということ、きっちり理解してもらうことがぜひ必要だと思います。(後略)」(「緊急シンポジウム・東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を考える～建学の志を伝える貴重な文化財を保存し、活かしていくために～」、46頁)

注7) 「(前略) 私も建物を見させていただいて、ここまで(補注: 7棟) 残すというのは英断だろうと思うのです。今は社会が変わってきました。昔のような『「古い施設を壊して綺麗にして新しい学生に対応していこう』という時代から少し変わらして、むしろ『どこまで歴史があり、どれだけの人材を社会に送って来たか』というポテンシャルが問われる時代になってきました。そういう意味で、古い建物、その大学のキャンパスというのはとても大事だ。それを共有することが、まさに先ほど出てきたsomethingになるのだらうと思うわけです。多分今の経営者の方々もそういうことに気づかれてはいる。だから七棟を、さらにはメモリアルという形で、キャンパスのある部分を残していこうと考えられている。(中略)

ただ『2013年度のキャンパス整備イメージ』を見て、私が懸念しますのは、いろいろな言葉が書いてありますが、メモリアルゾーンも本当にこのまま、きれいに残していつくれるのかどうか。確かに今は登録文化財としていますが、実のところ登録文化財は100パーセントその建物を維持、継承していくということを保証するものではありません。所有者の方から『今回はこれを壊すぞ』という形を取ることができるのです。

ですからむしろ、今我々はこの二棟も大事ですけれど、指定されている七棟をどういう形でしていくのか。さらには大学側がどういう形でこれを残していこうとしているのか。当然のことながらこれもきちんと見守り、さらには議論をして、これから補修工事があるなら、どういう形で工事がされていくのかということも、理解していく必要があります。そういうことをしていかなないと、このままだと外観だけは残す。ひょっとしたら極論をすると、壁一枚を残して壊されてしまう可能性だってあるのです。また後ろの方のフォレストゾーンについては、建物のことよりむしろ緑のことが書かれている。すると建物が本当にこのまま維持されるのかどうか。穿った見方をすると、ひょっとしたら知らないうちに消えていく可能性もあるわけです。

そういう意味で、まず大学が七棟を残すと発表したことについて、それをたまたま残すというのではなくて、将来計画としてきちんと位置付けて、未来永劫このまま展開していくことを確認し、そういう計画をまず評価して、その中に残る二棟がどういう意味をなすのかを、改め

て議論することだと思います。(後略)」(前掲シンポジウム報告、41～42頁)。

注8) 2007年1月12日、日本建築学会関東支部は、保存要望書の提出とその趣旨説明のための面談を申し入れたが、桃井事務局長より電話で、来校に及ばずと断られる。そのため1月15日に原田理事長・湊学長あて保存要望書を内容証明で郵送した。

なお、日本建築家協会関東甲信越支部も保存要望書の持参申しれを行ったが断られたため、今回の懇談会に間に合うよう、当日の1月18日午前9時に大学に出向いて提出。ただし、桃井事務局長には会えなかった。